少しの工夫で節水を

沖縄県　豊見城中学校　三年　長嶺　芽生

私達の身の回りにはたくさんの水がある。蛇口を捻れば水が出てきて、それを飲んだり、沸かしてカップラーメンに使ったりする。日々何も考えずに消費する水は、限りある資源であり、無尽蔵に湧いてくるものではないと知っていた。しかし、私達人間の住む陸地と海を社会科の授業で習った比率で見たら三対七、どう考えても使い切れないほどの水で溢れているのではないか、と思った。生活をしているとニュースや授業で世界や日本の水問題について考えるものがあった。世界の様々な水を生活用水としてそのまま使用できないことや、自分が想像しているほど水は大量にあるものではない、とぼんやりと知った頃に、二〇二五年、沖縄で断水が起きた。そこで私は身近なところで水問題について身をもって知ることになった。沖縄は海に囲まれているのになぜ水問題に直面しているのだろうか。

沖縄は、梅雨によく雨が降り、一部地域では冠水が起きるほどであるが、例えば梅雨のシーズン、台風シーズンの間の時期に雨が降らず渇水が続いたりすることもある。それだけではなく、地質の面から見ても水を蓄えにくい性質がある。琉球石灰岩が広く分布している沖縄は、たとえ雨が降ったとしても雨水が浸透しやすく地表に残り続けないため、地中での貯水が難しいという課題がある。沖縄は、水源を降水量に頼っていて、ダム依存型な水供給方法であり、地下水をあまり利用できないため渇水になりやすいのだ。

その他に、水を各地に供給するにあたっての課題として、インフラ施設の老朽化が挙げられる。昨年に起きた断水の原因は、六十年近く前に敷設された導水管が老朽化により破裂したことで起こったようで、施設の老朽化が水問題につながっている。こういった水問題を解決するためには、古くなったインフラ施設のリニューアルが必要不可欠なのだろう。

しかし、「政府がなんとかする」「県とか国に任せておこう」こういった楽観的で放任する姿勢が続けば、私達はいずれそう遠くない未来でさらにスケールが広がり難化した水問題に直面するであろう。では、私達はどのようにして対策をすればよいのだろうか。

沖縄県中部に位置する北谷町の「海水淡水化センター」では、海水から真水を作り出すことができる。このような技術があれば、本来人が利用するのに適さない水質の水も人に適したものに変えることができるのだ。しかし使用できる水を大量に増やしてデメリット無しの都合のいい道具を作ることは非常に難しい。海水淡水化施設の維持には膨大なコストがかかり、更にCO_2を排出してしまう、などのデメリットがある。ただ単に施設を増やしたり、老朽化の改善だけでは根本的な水問題の解決には至らないのだ。そこで、私達一人ひとりができて、日々の工夫で節水したり工夫した水の使用の仕方を考えなければいけないと思った。

生活の中で「工夫した節水の仕方」があればどのようなものか考えてみよう。例えば、家の中で一番水を使用するであろうお風呂場では、シャワーヘッドを節水仕様のものに付け替えたり、シャワーをこまめにとめたりするだけで大量の節水が可能だ。それだけではなく、トイレで水を流すときにレバーを場合によって変えたり、お米の研ぎ汁を水やりに活用したり、私達の生活の中では工夫をするだけで節水が行えるのだ。

水問題は人間の社会にだけ影響を与えるものでなく、いずれは他の生態系に影響を及ぼすほど深刻化していくかもしれない。水を使わない生活というのはどうやっても無理だと思うが、日々の工夫次第で節水が行える。水問題の解決には、実態を正しく理解することと、工夫が大事なのではないだろうか。